



平成18年に山口県・山口大学教育学部間で結ばれた「教育連携推進協定」に基づく「交流人事教員」

として、平成23年から三年間山口大学に勤務させていただいた。これは県下の公立小・中学校に勤務する教頭から一名ずつ山口大学へ派遣され、教員養成にかかわるというもので、私は小学校籍の二代目であった。

それまで長らく小学校現場にいたので、教える相手が急に大学生になることや一コマ90分の講義をすることには不安を覚えた。しかし、実際に接してみると学生たちはとても真面目で、特に教育学部の学生は「将来教員になる」という明確な目標をもち、積極的に講義に臨んでいた。

講義の時間は、単に「小学校の授業時間（45分）の二倍」という訳にはいかなかった。用意した内容では時間が余ったり、逆に時間が足りなくなったりと、なかなか90分の授業の流れを体得するには時間がかかった。

自分自身が講義に臨むに当たっては小学校のように教科書があるわけではないので、自分で教える内容を考え、教材や資料を作るなどした。これまで当たり前のように行っていた教育活動の本来の意味を再認識したり、法的な裏付けに改めて気付いたり、準備をしながら自分自身も勉強になった。

近年、大学では、学生の学校現場で

の体験を重視しており、教育実習はもちろんのこと、授業やそれ以外のボランティア活動でも積極的に学校現場に出ることを推奨していた。これには大変わりがたかった。

学生たちにとって卒業前の最後の試験が「教員採用試験」である。地域によって幾分は広き門になりつつあるとはいえ、学生たちの採用試験に向けての努力は並大抵のものではない。大学で関わった学生には皆、教員になってもらいたいと思いつつも、現実はずいぶん甘くない。

この春、久々に小学校現場に復帰し以前との違いに戸惑いながらも子どもたちと楽しく過ごしている。またこのたびは新規採用の先生と一緒に着任し、これまでかわった学生のイメージをタブラせながら、この先生を一人前に育てる責任も感じている。なかなか経験できない教員養成の現場での体験を生かして、人材育成の視点も大切にしながら、学校づくりをしていきたいと奮闘する毎日である。

教員養成の現場を体験して

美祢市立嘉万小学校校長 久保田 尚

飛耳長目

地域の宝「少年少女会」

長門市立通小学校校長 三戸 泰夫



「少年少女会」とは、通地区に古くからある子どもたちの組織で、土曜日の夜、地区ごとに集まる家を順番に決め、子どもたちが勉強したり遊んだりして過ごすコミュニケーションの一つである。上級生が下級生に勉強を教えたり、一緒に遊んでやったり

するなど、異年齢集団でのよいコミュニケーションの場であるとともに、主体となって運営にかかわることで、上級生のリーダーシップを育てるよい機会ともなっていた。日曜日には、地区の清掃などのボランティア活動も行われていたようである。

残っている記録によると、大正時代には既に行われていたようであるが、いづれから始まったかについては把握できていない。古くから漁師町であった通地区の風習として、一定の年齢に達した若者が各地区の漁師の家に集まり、共同生活を送りながら「漁師のいろは」を学んでいた。これに習って、学童期から、社会のルールやマナーを学び、集団内

での責任や協力、思いやりなどを培う場として始まったといわれている。時代の流れとともに、途切れては復活を繰り返してきたが、「平成」の初めごろまで行われていた地区もある。

平成二十二年度の六年生が総合的な学習の時間でふるさと学習に取り組んだ時、子どもたちがこのことを知り、詳しく調べていく中で、「自分たちもやってみよう」と「復活させよう」という声が上がった。そこで、通地区合同文化祭（学習発表会）で、調べたこととの発表と、復活させようという呼びかけを行ったところ、子どもたちの思いを何とか受け止めようと、その年に始まった学校運営協議会の地域支援グループの活動として、社会教育と連携をとりながら取り組むこととなった。

再スタートしてから五年目を迎えた本年度は、全校児童二十九名が、「少年会」と「少女会」の二つのグループに分かれて活動している。毎月第二土曜日の午後、公民館に集まり、各自が持ち寄った「学習」と、異年齢集団での「遊び」を主な内容として実施している。また、青少年育成市民会議との連携により、「地域探訪」や「リトミック」、「ふれあい水族館」など、活動内容の充実も図られてきた。

通地区だけに残る子どもたちの自主的な活動として、これからもしっかりと根付いていってほしい。